

# 京大病院小児科病棟訪問

大井瑛仁、京都大学大学院宇宙物理学教室院生会(京都大)

有本淳一(洛陽工業高)、嶺重慎(京都大)

京都大学宇宙物理学教室では、京都大学医学部病院小児科のボランティアグループ「にこにこトマト」と天体観望支援ボランティア「黄華堂」と連携し、京都大学病院の入院児童向けの月の観望やプラネタリウムの催しを行っている。その取り組み内容と、参加された子どもたちやご家族からの評価を紹介する。

## 1. 京大病院での活動について

京都大学宇宙物理学教室では、京大病院小児科に入院している子どもたち・保護者(ご家族)の皆さんに、星・宇宙に親しんで、楽しんでもらう活動を行っている。これは、京大病院小児科ボランティアグループの「にこにこトマト」の活動に、天文観望支援ボランティア団体「黄華堂」と共同で参加している活動である。

「健常児と変わらない日常を子どもたちに—」という純粋な気持ちから始まった「にこにこトマト」のイベントは平日にほぼ毎日開かれており、我々の天文のイベントは年に4回のペースで参加している。小児科プレイルームにお邪魔して行いう星・宇宙のお話の部(約15分)と、院内広場の窓際で行う屋内天体観望会や風圧ドーム式の屋内プラネタリウム、Mitakaを用いた宇宙旅行、大判・サイコロパズルを行う部(約1時間)があり、それぞれ昼の部、夜の部と呼んでいる。

イベントに参加する宇宙物理学教室の院生は、昼の部は4名、夜の部は約7名で参加しており、より多くの院生が参加できるよう、毎回参加者を募って活動を行っている。なお、当日に体調の心配が少しでもある場合は参加を避け、プレイルーム入室にはマスクの着用や手のアルコール殺菌など、感染に気を付けて活動を行っている。

## 2. 「昼の部」の活動内容

16時30分から小児科プレイルームにお邪魔し、未就学児を中心とした子ども4、5人と保護者、院生スタッフを合わせ、10-15人の規模で活動を行っている。その日の夜の部で観望する予定の「今日の星空」や、惑星などの名前を当てる「クイズ」を主としたお話を行っている。「今日の星空」で紹介する星座や星は、単に何が見えるかではなく、例えば七夕に近い時期では織姫・彦星のお話を交えるなど、季節に合わせた代表的な星座を取り上げ、「夜の部」で星座・星を探そう楽しみが増すよう工夫している。「クイズ」では、惑星の写真を多く見せ、クイズを通じ色々な惑星があることを知ってもらったり、天文イベントに合わせて彗星を取り上げたりと、話題性富んだお話になるよう心がけている。

未就学にも関わらず星・宇宙に詳しい子がいたり、クイズの答えに対し純粋で鋭い質問が挙がったりと、興味・関心を持って聞いてくれる子どもたちが多く、なかなか盛り上がっている。また、保護者からの質問も多く、彗星をテーマにしたクイズでは、パンスターズ彗星やアイソン彗星の見える時期を再度確認される方もおり、大人にも興味を持って頂いている。

お話に参加してくれた子どもたちに「しおり」や「パズル」などのお土産を用意しており、お話で取り上げた星・宇宙以外にも色々な世界があることを知ってもらえるよう、お話では取り上げにくい星雲や天文台の写真などを採用している。どれにしようか迷ってしまう子がいたり、保護者からも欲しいとの声があったりと、簡素なお土産であるにも関わらず好評を頂いている。

### 3. 「夜の部(観望会バージョン)」の活動内容

「昼の部」と同日 19 時から病棟 4 階の南に面した病棟内広場にて行っており、未就学児から中高生まで約 10 人とそのご家族、院生スタッフを合わせて計 20 人ほどの規模になる(写真1)。開始前に小児科の院内放送をお借りし、アナウンスしている。「昼の部」でお話した星座を探したり、望遠鏡では主に月を、出れば惑星を観望したりする。見て分かりやすい月のクレーターが人気で、望遠鏡をのぞきながら思わず声の上がる子や、ご家族の方がかじり付いて望遠鏡をのぞいていることが多い。雲ってしまった場合は京都タワーやお寺の屋根などを観望する。特に京都タワーが大きく見えることに驚く子どもやご家族が多く、隠れた人気の観望対象になっている。観望の途中で雲がかかってしまう場合もあるが、見えなくなったからと諦めずに雲が抜けるまで頑張っている子どもたちが多く、観望させてあげられて良かったと癒される場面がある。

観望会と同じ広場にて、Mitaka を使った宇宙旅行、大判パズル、サイコロパズルを同時に行っている。望遠鏡の観望順番待ちに用意しているが、Mitaka やパズルの方が気に入る子どももいる。Mitaka の操作が院生スタッフより上手かったり、パズルを全てさらりと完成させたりと、個性の光る子どもたちが多く、一方で、順番待ちで子ども同士の喧嘩になることもなく、スムーズにイベントが行えるのは子どもたちが純粋に興味を持ってきているお陰と感じている。



写真1 観望会の様子

晴れを待って空を見上げる親子や、Mitaka やパズルを行っている人だかりの様子が写っている。

### 4. 「夜の部(プラネタリウムバージョン)」の活動内容

夏の時期は日の入りが遅く 19 時からでは星が見えないため、代わりに屋内プラネタリウムを広場に展開して活動を行っている。1回 10分程度の解説を 3-4 セット行っている。ドームは子ども 20 人が十分に入

れる大きさのものであるが、ドームを膨らますと院内の天井に接する大きさになり、照明や火災報知機をドームで埋めてしまわないよう、設置に注意が必要である。また、設置が夏場であるためドーム内が暑かったり、点滴を持った子や車椅子の子の出入りでトラブルがあったり、といった点がある。一方で、観望と違い投影された星がたくさん見られることが好評であり、次の入場者と交代になってもなかなかドームから出たがらない子が多い。そういった場合はドーム内の暑さに気をつけながら、引き続きドーム内で時間いっぱい楽しんでもらえるよう対応している。また、観望会でも行っている Mitaka やパズルも同時に行っている。

## 5. 課題と今後の展望

以上のように、京大小児科病棟で行っている天文イベントは年4回であるが、毎回好評を頂いており、今後とも安定したイベントを開催できるよう、宇宙物理学教室院生会で引き継いでいくべき大切な活動である。これは、「にこにこトマト」による健常児と変わらない日常が小児科病棟にあるからこそもたらされる成果である。一方で、参加する院生は有志を毎回募っているため、常連メンバー不在で勝手が分からず戸惑うことや、人数不足でイベント中の人手が心配な場面がある。院生会で大々的な活動に発展させる解も考えられるが、院生会で特別な活動とせず、院生の誰もが気軽に参加でき、集まったメンバーに合わせて臨機応変にイベント対応ができるユニバーサルデザインな活動を目指すことが、日常を壊さず安定したイベント開催を継続できる一つの方法であると筆者は考える。

本イベントは入院児童向けではあるが、同伴された保護者・ご家族にも楽しんでもらっており、場合によっては看病疲れに対するご家族の癒しにもなっているのではないかと考えられる。そういった面から、天文という分野が老若男女や知識の度合いなど関係なしに楽しめるユニバーサルなものであることが伺える。そういった視点で自身の研究を深めたり、一般の方へ向けて発信したりできる、ユニバーサルデザインな研究展開ができる教室であるよう働きかけていきたい。

## 6. 最後に(心に残ったエピソード)

最後に、この活動を通じて聞いた心に残ったエピソードを紹介する。筆者である私がこの活動に参加できて良かった、今後も続けていきたいと心に残り続けるエピソードである。

—お兄ちゃんが入院している弟くんの話—

「お兄ちゃんが早くから入院していて、お父さん・お母さんがお兄ちゃんの看病ばかりで、いつも寂しかった。お兄ちゃんのお見舞いに行ったときに、にこにこトマトのプラネタリウムがたまたまやっていて、みんなで見に行ったらとても楽しかった。家族4人で行った初めての家族旅行でとても嬉しかった」